

と) 国家意識の健全な進展がみられる。明治後期、人民大衆による社会的政治的変革意欲が次第に自覚化され、これを媒介に人民大衆の人間性の解放が希求されるにいたる。しかし明治政権の苛酷な抑圧、指導者の思想的立場の弱さによって挫折し、人民大衆の政治的、人間的自覚は、人民的な国民国家意識にまで進展しえずに終った。かかる見通しのもとに、具体的には陸羯南と北村透谷——歴史的・浪漫的な政治的人間の主体性、石川啄木と魚住影雄——自然主義思想との関連において、木下尚江——社会主義思想との関連において、秋水と尚江の非政治的偏向について、がとりあげられ、さらに明治二〇年代以後の国民国家意識が生み出した二人の史論家、山路愛山と竹越三又がとりあげられる。その方法としては各思想家の思想を一応「積極面と限界面に分別」するが、「この両者は密着し纏結した統一体をなしているものであり、この両者の統一の把握こそが、近代思想史究明でなければならぬ」とされる。たとえば愛山の場合、その数々の史論に流れるのは「平民主義」であり、明治後期の資本と労働の現状も正しく理解し、「人民の味方」であっ

た。しかし彼の階級的出陣から必然的に影響の深かった儒教の前近代的世界観と国家主義的偏向の故に「まぬがれ難い限界」をもち、国家主義と人民主義の統一理論に到達し得ず、ここに「偉大なる歴史家、先覚者の模索と苦悩をみる」とされる。陸羯南以下透谷・啄木など、従来とも多くの研究が積み重ねられてきたが、愛山・三又の二人は、従来史学史・思想史ともに真正面からとりあげられることは少なかった。近時漸くあらためてその史論の覆刻が行なわれているが、いまこの論考を得たことの意義は大きいであろう。著者長年の地道な努力が、近時学術書出版事情の悪化にもかかわらず上梓されたことを喜ぶとともに、今後一層深く体系化されんことを切望する次第である。

(B 6版 二〇四頁 昭和三九年四月 東峰出版(株) 定価七〇〇円)(熱田 公)

鏡味完一著

地名学

鏡味氏は昨年亡くなられるまで生涯を地名研究に捧げられた数少ない人の一人であり、

とりわけ地名研究に体系化と科学的処理を企てられたほとんどの唯一の人であった。本書は著者の前著『日本地名学・科学編』(一九五七)及び『同・地図編』(一九五八)に続くものであり、両著刊行後各種の雑誌に発表された論文、及び未発表の遺稿となった論文を、著者の令息鏡味明克氏が編集し、三部作の一つとされたものである。従って本書だけを取り出せば、やや断片的な諸論文の集成という感を受けるが、著者の全体系中での個々の論文の位置づけは、四四九頁、分類総目次によって理解出来る様に配慮がなされている。

内容を順に追えば、まず「A理論編」に於ては、「I地名学の本質と方法」と題して、著者の地名学を地名学の一科として地名地理学と規定し、著者の主要な方法——地形図の集落名を基本的資料としその分布状態の検討を通じて諸理論を組み立てる——の正当性が主張されている。次に「II地名分布の傾向の原則」では、主として地名分布の範囲と分布密度・分布の重心点と地名分布上の東西日本の対立が記されており、「II母音の対応と地名」では、地名における母音対応の可能性、従って方言の発

展の研究との対比を通じて、地名学と方言学の相互寄与の可能性が述べられている。

「B研究編」「(A)日本の部」では、まず「I地名分布における空洞現象」が扱われているが、その内の「周囲空洞」の考え方は著者の地名伝播説一般に関わるものであり、おそらく柳田国男の『蝸牛考』にヒントを得たものであろう。更に「II(C)地名の分布と扇状帯」に於ては、地名分布の不連続線ないし不連続帯(扇状帯をなす)によって日本を地域区分し、方言区画等の比較を試みている。「(B)外国の部、地域別論考」、「(C)外国の部、書評」及び「研究篇補遺」は、著者のオリジナルな論文「朝鮮の里・洞の地名」を除けば、いずれも欧米の学者による地名研究の紹介であり、欧米の地名学との交流を常に心掛けていた著者の努力の現われである。本書ではこの部分に最も多くの頁数が割かれており、内容も多岐に渡り対象地域も世界各地に及んでいるが、その中ではとりわけ集落発達史との関連におけるドイツの地名学的諸研究、すなわちディットマイヤー、ヤンクーン、克蘭ツマイヤー、ニーマイヤー等の紹介が、最も興味深い部分となっている。

「C応用編」は地名の命名法・表現法に關する論考を、「D雑編」はその他の諸雜考を収録しており、更に巻末には「日本地名語原辞典稿」及び「世界地名学最近文献目録」が添えられていて地名研究者に便宜を供している。

ところで、著者の「地名地理学」の規定や、著者の方法論——とりわけ地形図の集落名を基本的資料としその分布から仮説を積み上げて行くと云う方法には、なお充分な吟味検討が必要とされるであらう。例えば地名研究のより一層の深化と発展のためには小字名や地点名のより詳細な採集と分析が必要な事は云うまでもない。とは云え、地名研究の現状を考える時、鏡味氏の成果はそれ自体の限界はあるとしても、最大限の個人的努力の集大成として正当な評価を受けるべきだと考える。地名研究は、一方では方言学ないし言語学の一資料として、又一方では歴史地理学とりわけ集落発達史研究の重要な武器として、研究目的の分化傾向を含みながらも、その必要性が失われる事はまずないであらうし、鏡味氏の地名伝播の周囲説や地名発生の年代比定は、そうした研究にとって極めて示唆的であると言

えるのである。

(A5判四八〇頁 昭和四十年二月日本地名学研究所刊 定価三八〇〇円)

(石原 潤)